

## ソバを使った農業振興への取り組み

生物資源科学部 アグリビジネス学科  
1年 佐藤 凜  
1年 本村 駿太郎  
指導教員 生物資源科学部 アグリビジネス学科  
教授 岡田 直樹

### 1. 背景と目的

「秋田県では、農村が衰退しているのではないか?」「農業による地域活性化には、どんな取り組みが必要か?」。こうした漠然とした感覚から、研究をスタートさせた。しかし、そもそも秋田県の農業事情がわからず、活性化の方法が思い浮かばない。そこで、県の農業統計を整理したところ、近年、ソバの作付けが拡大していることがわかった。広がるソバ生産を地域振興に生かすことができないか?実際にソバ生産が農村振興にどのように用いられるのか、そこに関心を抱いた。

本研究の目的は、ソバと地域活性化の関係の解明にある。具体的には「ソバ生産を用いた地域活性化の方策の探求」である。また、研究を進めるにあたって、次のスタンスをとっている。①地域の課題を意識し、その地域にあった解決方法を考えること、②生産だけでなく、地域全体の活性化を視野に入れること、③ソバの生産から域内利用まで、一連の体系として把握すること。

### 2. 研究方法

本研究では、以下の3市町におけるソバの生産と利用に関する実態調査（生産者、自治体職員等へのヒアリング）と、結果の比較分析による。対象市町村は次の通り。

- ①鹿角市：ソバ生産が拡大する新興地域。
- ②羽後町：株式会社ソバ研を中心に、ソバの組織的生産・製粉・販売体制が構築され、同時に多くのソバ店があるなど、県内のソバ文化の中心地。
- ③尾花沢市（山形県）：蕎麦店や生産者によりそば振興会が組織され、ソバの生産・流通・販売に組織的に取り組まれている先進地域。「尾花沢そば」は地域ブランドとなっている。

### 3. 結果

#### 1) ソバ生産・流通・販売の実態

##### (1) 鹿角市

鹿角市では、離農とともに耕作放棄地が急速に拡大し、農地としての利用がもはやできない圃場もみられた。引き続き離農の動向に対し、ソバの作付け拡大がなされてきた。ソバの作付けは、多くが水田転作であり、助成金が作付けの経済的前提となっていた。

ソバの生産は、農業法人（集落営農法人）や公社が中心になっている。これらは、自らの農地にソバを作付けするほか、希望農家から播種や収穫作業を受託しているが、近年は、作業受託にかわり、農地を借地しソバの生産を行う方向に変化がみられた。法人や公社では、希望に沿って作業や借地を引き受けるが、荒れ地化していて引き受けられない場所も出てきているとのことだった。

集落営農法人・大里ファームでは、ソバ生産にかかわって次の状況が見られた。農地210haのうち206haでソバ生産をしている。地域的なソバ振興に向けて、市民を招いた収穫祭の開催や、乾麺とそばつゆのセット販売を行っている。ただし、ソバの売り上げは低調とのことだった。

鹿角市全体として、次の状況が見られた。ソバの作付け品種は、にじゆたか、階上早生、レラノカオリである。これらは、秋田県で広く栽培されている品種といえる。ソバ生産の課題として、排水対策が不十分で、品質が概してよくなく、収量も低いことがある。このため、ソバの生産は、ソバ自体の売り上げではなく、助成金により経済性を得ている。収穫後、乾燥されたソバは、殻付きのまま、市外・県外の製粉会社へ出荷される。市内にはソバ店が少なく、ソバを食べる文化がないという。集落営農法人の直営店をのぞき、地元産のソバが食べられる場所はない。すなわち、ソバは、ほとんど地域内流通しない。

ソバ生産～販売における課題として、以下がある。①ソバ生産の担い手の不足。個々の法人における労働力や後継者の不足、②個々の法人における、大面積の作業に必要な大型トラクタの不足、③不十分な排水対策とソバの低品質・低収量、このため、④転作助成金に依存したソバ生産、⑤市内における利用の少なさと低い認知度。

以上のように、鹿角市では、耕作放棄の回避対策としてソバ生産が進んだが、安定したソバ生産に必要な圃場条件整備や機械手段確保ができておらず、ソバ自体の経済性も低い。また、ソバの担い手となる法人等では担い手不足に直面しており、安定した生産体制は構築できていないとみられる。さらに、ソバの市内消費も少なく、「住民に支えられたソバ生産」とはなっていないといえる。

## (2) 羽後町

羽後町では、ソバの生産・製粉・出荷を一手に担う組織として、株式会社そば研が設立されている。そば研は農業生産法人で、ソバの生産が拡大してきた平成 24 年に設立されている。

羽後町では、省力的な水田転作物としてソバが選択されてきた。作業は、そば研の職員とそば研の構成農家の共同作業で行われる。ソバ研では、若手従業員を雇用し、担い手の安定化を図っている。水田の排水対策が不十分で、ソバの品質・収量が劣位・不安定という課題がある。ソバの品種は、にじゆたかに統一されている。そば研では、ソバの生産を希望する農家から作業受託したり、借地によるソバ生産を行う。町内の農家は、農地所有へのこだわりが強く、農地集積と効率的作業の実施がほとんどできないという。

そば研では、そば研以外の農家が生産したソバも買取る。そば研では、生産したソバ製粉し、販売する。ソバの多くは、県北や関東の大手製粉会社に出荷される。製粉会社では、こうしたソバ粉をブレンド用に用いるといい、「羽後町産」が前面に出ることはないという。

町内には、多数の蕎麦屋があり、蕎麦店マップを作成するなどして地域振興をはかっている。しかし、地元産のソバを使うのは、そば研の会長が経営する「彦三」一店のみという。地元産のソバは品質が悪いため、蕎麦店では嫌われるという。

以上のことは、羽後町では、①ソバ生産の組織的な作業体制が構築されていること、ただし②農地が流動化せず一区画が小さいなど、効率的作業の体制にはないこと、③排水対策が不十分で、ソバの品質や収量が劣位なこと、この結果④ソバの地域内流通は限られ、地元産ソバが地域振興に結び付いていない状況にあることを意味する。

## (3) 尾花沢市（山形県）

尾花沢市では、水田転作としてソバの生産が拡大したが、平成 22 年に設立された尾花沢市そば生産振興協議会（以下、協議会とする）のもとで、生産・流通・消費体制が転換されてきた。

協議会は、一人の蕎麦店店主の、「地元産のソバを蕎麦店で使わなくてはならない」という強い意向のもとで設立されたもので、市内の全蕎麦店と、そば生産の中核となる農業法人等で構成され、事務局は市役所が担っている。協議会を中心に、次の取り組みが行われてきた。

### ①独自品種の探索

食味の良い、他では生産されない独自品種が探索され、県農業試験場に保管されていた最上早

生を市内で作付けする唯一の品種として決定した。

## ②種子生産体制の構築

山間部の牧草地を借り受け、原々種生産圃場を造成した。これは、ソバが交雑回避のための対応であり、圃場の造成作業や原々種の生産作業は、蕎麦店と農家間で共同で行われてきた。生産された原々種は、町内の原種圃場に移され、生産された種子が各農家で用いられる。

## ③ソバ生産体制の構築

ソバ生産農家として、中核的法人がソバの生産や作業受託を行う体制が整えられた。

## ④排水改良対策の誘導

そばの品質向上に向けて、暗渠等による個々の農家の排水改良対策を促すため、市から 10a 当たり 5,000 円の助成金が支給される制度が設定され、排水改良対策が進んできた。

## ⑤流通体制の再編と地域振興の連動

生産されたソバの一部は、市内蕎麦店全店で使用される。尾花沢市の蕎麦店は、全量、尾花沢産の最上早生を用いる。ソバは殻付きで引き取られ、各蕎麦店で製粉される。市内の蕎麦店は、「尾花沢そば街道」として宣伝され、尾花沢のソバを食べるために来市する人も多いという。蕎麦店での利用は生産されたソバの一部で、残りのソバは JA により全農に出荷される。東京等の蕎麦店や製粉会社等から引き合いがあり、「尾花沢そば」として認識されてきている。

## ⑥新たな商品開発

市内の高校生等により、新たな商品開発が進められており、そばガレット等の新商品が売り出されている。

尾花沢市におけるソバ生産・流通・消費にかかわる課題として、農政の不透明性が指摘される。単収向上・安定化が進んだが、依然として、ソバの作付けは水田転作の助成金に依存する状況という。このため、助成措置がなくなった場合ソバの生産が不安定化する恐れがあり、より大胆な生産拡大に取り組めない状況という。

## 2) 比較分析：ソバ生産と地域活性化

鹿角市、羽後町、尾花沢市の取り組みを、推進主体、生産状況、流通状況に注目して、表にまとめた。

推進主体は、鹿角市が個々の中核的生産者で、全体で組織化された取り組みとはなっていないのに対し、羽後町では生産者が株式会社そば研に組織化されている。このことは、品種の統一などの生産面での統合的対応につながっている。さらに尾花沢市では、生産者だけでなく、蕎麦店、すなわちソバの需要者による組織体制がとられている。こうした体制は、対策が生産面だけでなく、蕎麦店での市内産の全量利用など消費面での対応を促し、ソバのブランド化につながっている。

生産状況では、鹿角市では、生産者個々の対応となるため、機械装備が不十分、担い手確保ができない等の課題が生じやすい。羽後町では、生産者が組織化されることで、そうした課題は解消されているが、鹿角市同様、ソバを作付けする農地の所有者が個別分散しているため、ソバの品質・収量向上に必要な排水対策が進まない状況がみられる。一方、尾花沢市では、やはり排水対策は課題となるものの、一本化された戦略のもとで、市による排水対策への助成措置が引き出されている。

流通状況では、鹿角市では、ソバのほとんどが市外・県外へ移出され、その利用形態も他のソバとのブレンド用で、鹿角産としてのブランド化はみられない。こうした状況は羽後町でも同様であり、蕎麦の町としての地域振興と連動していない。一方、尾花沢市では、すべての蕎麦店で市内産ソバが全量利用され、独自品種の利用と相まって尾花沢産ソバとしての評価が得られる機会がつくられている。市内での利用は一部に過ぎないが、尾花沢ブランドとして評価されることで、市外出荷についても一定の価格が得られる状況を生み出している。

表 鹿角市、羽後町、尾花沢市におけるソバの生産・流通体制

		鹿角市	羽後町	尾花沢市
推進主体		個々の中核的生産者	株式会社そば研 (中核的生産者)	そば生産振興協議会 (蕎麦店、中核的生産者)
作業の担い手		農業法人・農業生産法人	株式会社そば研	農業法人
生産状況	主たる作付圃場	水田(転作地)	水田(転作地)	水田(転作地)
	生産の特徴	①品種の未統一(普及品種の利用) ②排水対策が不十分、低品質・低収量 ③大規模作業の機械体制不十分 ④担い手の不足	①品種の統一(普及品種の利用) ②排水対策が不十分、低品質・低収量 ③農地集積困難、効率的作業に制約	①品種統一(独自品種・種子生産) ②助成金による排水対策の誘導
流通状況	流通先	市外・県外出荷	市外・県外出荷	市内蕎麦店は全量市内産を利用 多くは首都圏等
	使途	ブレンド原料	ブレンド原料	一定量はブランドとして食用
	地元流通	ほとんどなし	ほとんどなし(地域のそば振興と乖離)	一部は地元利用(新たな商品開発)
特徴		転作助成に依存した生産(生産体制は個別)	転作助成に依存した生産(生産体制は組織化)	ブランド化をベースとした総合戦略

#### 4. 考察：ソバ生産による地域活性化のステップ

鹿角市をモデルに、ソバを地域活性化につなげるための方策を考察・提案する。事例間の比較分析から、ソバの生産安定化やそのもとでの地域活性化は、個々バラバラな取り組みでは達成できないことがわかる。ここでは、以下の3つのステップをとる必要があると考えられる(図)。

第一に、将来にわたりソバ振興にかかわるステークホルダー(生産者、蕎麦店、自治体、市民等)により、ソバを地域資源として徹底して活用するためのグランド・デザインを策定し、共有することである。

第二に、ソバ生産においては、鹿角市固有の、他では得られない、おいしいソバの安定生産が必要となる。このことは、生産者のプライドを高め、消費者の積極的なソバ利用を促す前提となる。これに向けて、品種の選択、生産技術の改良、排水対策の実施等、先行投資を進める。

第三に、ソバの利用面で、蕎麦店での地元産利用、学校給食等での利用、生麺乾麺の直売、あるいは市役所が先陣を切ったの宣伝等により、市内での利用を徹底して増やすことである。蕎麦店や市民からの高い評価は、鹿角産ソバのブランド化と、価格安定につながる可能性を高める。

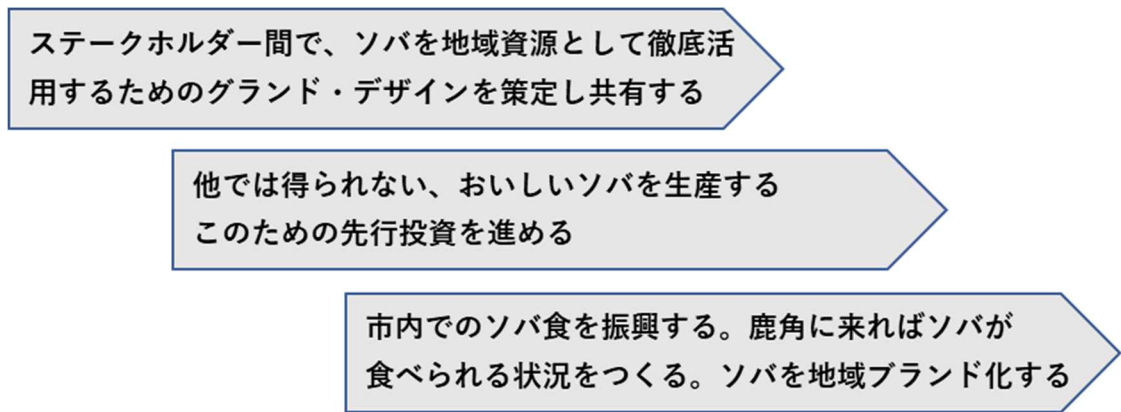


図 ソバ生産を地域活性化につなげるためのステップ